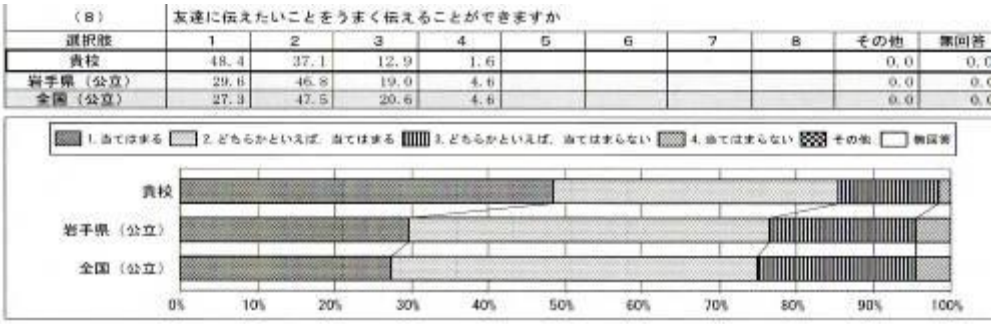
平成２６年度　各種調査結果等を活用した学力向上の取組事例

事務所名	盛岡	学校名	紫波町立赤石小学校	ＴＥＬ	(019)672－3460

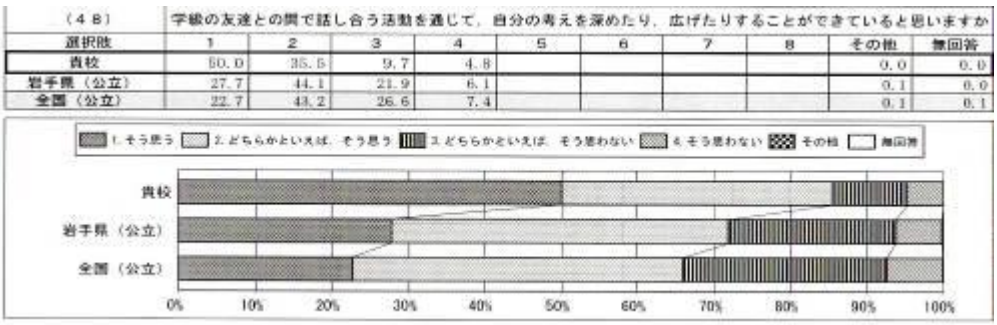
単元を貫く言語活動の工夫及びコミュニケーション能力の育成

【ねらい】

異文化コミュニケーション能力、世代間コミュニケーション能力、そして楽しく充実した学校生活を送るうえで、何よりも大切な人間関係に関するコミュニケーション能力は、これからの時代を生きる子どもたちにとって必要不可欠な能力である。本校では、平成 21 年度から主に「外国語活動」を窓口にして、コミュニケーション能力の育成に取り組んできた。また平成 26 年度からは枠を広げ、国語と道徳の時間においても、コミュニケーション能力の育成について研究を進めている。今年度の全国学調に係る質問紙調査の結果を見ると、コミュニケーション能力の育成に関する事項については【図－１】【図－２】のような結果が示された。どちらの質問についても、肯定的な回答について高い数値を示しており、これまでの実践の成果が顕著に表れたと言える。



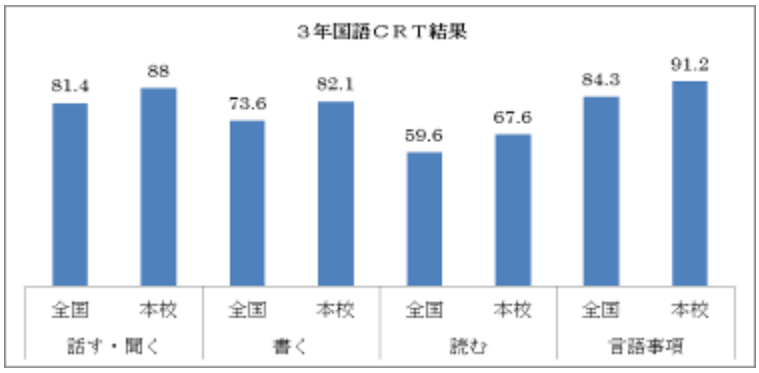
【図－１】



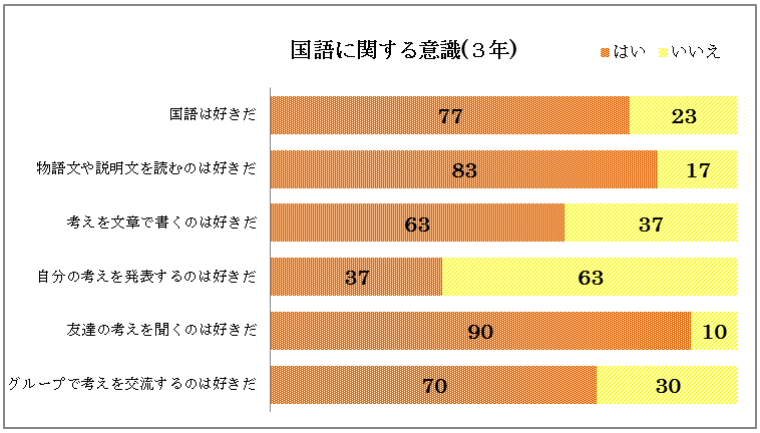
【図－２】

一方で、教員からは、「授業場面で、具体的にどうすればコミュニケーション能力が育つのか、その方途を考えたい」といった課題も挙げられた。そこで平成 26 年度からは、学校教育目標の中に「かかわり合って活動する子ども（人間関係形成力の育成）」を位置付けた。またそのことに関する重点として、「思いや考えを伝え合う表現力の向上」「課題解決を図るためのグループ形態の工夫」等を設定し、実践を通して子どもの姿の変容を目指している。

また、【図－３】に示した通り、４月に実施したＣＲＴの結果を見ると、３年の国語については、全国と比較してどの領域も正答率が上回っており、授業改善及び学力向上に関する取組の成果が上がっていると言える。しかし、領域別にみると、特に「読むこと」においてやや正答率が低い状況



【図－３】



【図－４】

にある。本校３年生を対象とした国語科に関する事前アンケート【図－４】では、文章を読むことは好きでも、そこから自分の考えを文章に表すことは苦手と答えた児童も多く見られた。また、発表することに苦手意識を感じており、もっと得意になりたいと感じている子どももいた。

そこで、このような児童の実態をもとに、自分の考えを文章に表す方法を学び、また交流を通して読みを深めた自分の考えについて自信をもって発表しようとする姿を目指し、以下のような実践を行った。

【具体的な取組】

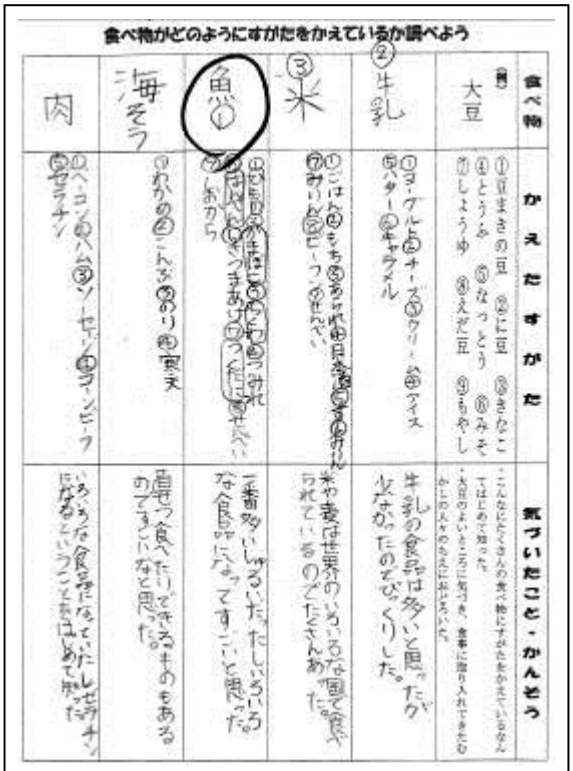
３年国語科「読むこと」における実践

【単元名；せつめい文マスターになろう

教材名「すがたをかえる大豆」「食べ物のひみつを教えます」（光村図書３年下）】

【単元を貫く言語活動】

本単元は、子どもが正確な読みの力を高めていくために教材を通して「分かりやすい説明の仕方を学ぶ」こと、さらに、その「説明の仕方」を使い、具体的な材料をもとにして実際に自分で「分かりやすい説明文を書くこと」をねらいとしている。そのため本単元を貫く言語活動として、「説明文マスター」になって「すがたをかえる○○リーフレット」を作ることを位置付けた。リーフレット作りは、全体の構成や表現の工夫、具体例等を分かりやすく表現できる効果的な題材である。作ったリーフレットを図書室に置き、他学年に紹介するという学習のゴールを明確に設定することで相手意識や目的意識をもち、主体的な学習を行わせたいと考えた。その際、教材文の読み取りと並行し、【図－５】のように、自分が興味のある食べ物に関する事典や図鑑、本等を読み情報収集させた。またリーフレットにまとめる際には、教材文で読み取った「説明文マスター」になるための要素を意識させながら、それぞれが並行読書で調べた食べ物について文章構成や段落相互の関係を意識してまとめることができるよう指導した。

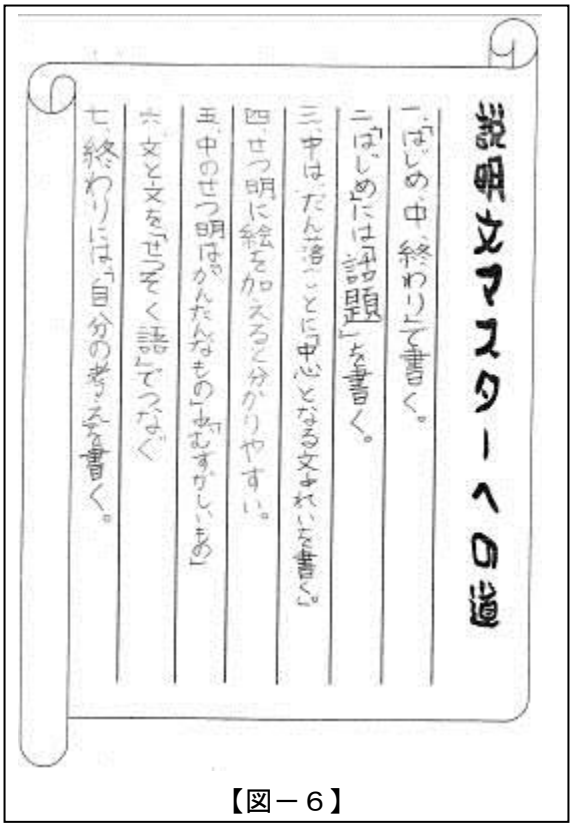


【図－５】

【指導の概要】

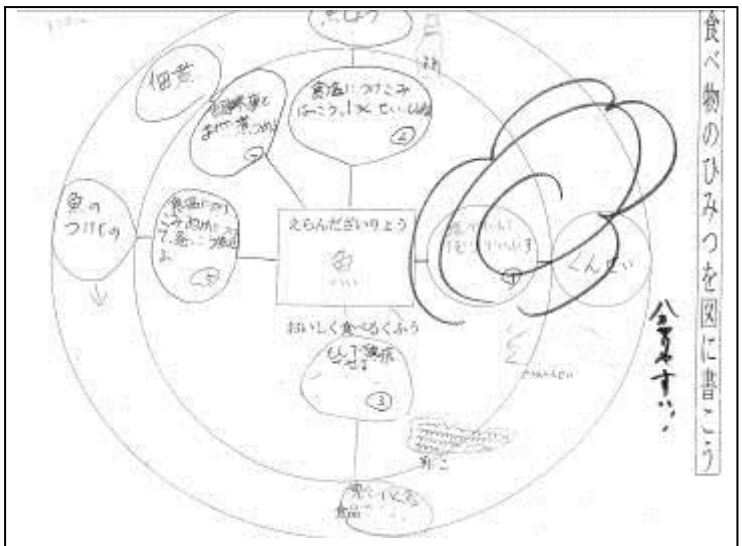
第１次では、単元のゴールを「食べ物のひみつを調べ、まとめて、説明文マスターになろう」とし、「説明文マスター」になるために、本教材から読者に分かりやすい説明文の書き方を学び、同時に自分が知りたい食べ物について調べていくという学習の見通しをもたせた。

第２次では、【図－６】のように「説明文マスター」になるための要素を教材文から探る学習を展開した。まず「はじめ・なか・おわり」の文章構成を捉えさせ、それぞれの役割について理解させた。また「くふう」という言葉に着目させながら、大豆がどのように姿を変えるのか、中心となる文をまとめさせた。その後「くふう」がどのような順序で書かれているか段落相互の関係を捉えながら考える学習を行い、第３次の「すがたをかえる食べ物リーフレット」作りにおける「例をあげて説明する学習」に生かした。



【図－６】

第３次では、第２次で学習した「説明文マスター」になるための要素をふまえながら、自分で説明文をリーフレットの形でまとめる活動を行った。まず調べて分かったことを【図－７】のようにマッピングし、書きたい情報を整理させた。その後、「はじめ・なか・おわり」の文章構成で書くこと、各段落において一文目に中心となる文を書くこと、接続語を効果的に用いながら段落相互の関係を考え、読み手に分かりやすい順になるように書くこと等、教材文で学んだことと関連付けながらリーフレット作りに取り組ませた。



【図－７】

【コミュニケーション能力の育成に関わる支援と工夫】

本単元において、コミュニケーション能力の育成に関わる支援と工夫は次の通りである。

１　コミュニケーションを成立させるための支援について

(1)「話し合いの手順」【表－１】を示すことで、どの子どもも、ポイントを意識して自分の考えが伝えられるようにする。

(2) グループ交流を「何のために、どのように」行うのか、モデルを示すことで主体的に交流を図ることができるようにする。

(3) グループ交流において、司会者の進行によって互いの考えが深まるように「司会進行カード」【表－２】を活用して話し合いの流れを習得させる。

【表－１】
話し合いの手順
①司会がすすめる。
②発表する。
③自分の考えとくらべて
感想をいう。
「わたしは、〇〇さんの考えは、
わたしの考えと（にていて）
（ちがって）
・・・・・・という考え方が
・・・と思いました。
④感想を書き足す。

【表－２】
すがたをかえる大豆司会進行カード
これから、話し合いをはじめます。
まず、〇〇さん、考えを発表してください。
（〇〇さん発表する）
△△さん、感想をおねがいします。
次に、△△さん、考えを発表してください。
（△△さん発表する）
〇〇さん、感想をおねがいします。
最後に、わたし（ぼく）の考えを発表します。
（司会が発表する）
感想をおねがいします。〇〇さん。
△△さん。
では、ほかの二人の考えをノートに書き足しましょう。

２　協働して課題解決を図る場面設定の支援と工夫

本単元では、共同して課題解決を図る場として、グループで考えを交流し合う場面を設定した。グループ交流の場を設定することにより、自分の考えはあるものの、発言に消極的だったり、恥ずかしさから発表に抵抗があったりする子どもも主体的に友達と考えを交流することができるからである。また、友達の考えから自分が気付かなかった点や考えの違いに着目し、自分の考えを見つめ直したり、深めたりできるようにしたいとも考えた。グループ交流の具体的な交流場面については、「中（具体例）における事例の説明の仕方の工夫」をもとに紹介する。

グループで考えを交流し合う子ども

本時のグループ交流のねらいは、自分の考えと相手の考えを比べて、共通点や相違点を見出し表現できることである。具体的には、教科書の事例の並べ方と教師提示の並べ方を比較し、筆者の説明の工夫について自分なりに考えさせることである。Mさんのグループは、次のような交流をしていた。

Ｙ君　「先生は、好きな順に並べていたけど、筆者の国分さんは、小さな形の物から大きな形の物へ並べていたと思います。」
Ｓさん「Ｙ君の考えは、自分の考えとは全く違っていましたが、面白くて良いと思いました。わたしは、筆者は、簡単に作れる物から、何かを入れないと作れない物の順に並べていたと思います」
Ｍさん「わたしもＳさんと同じで、作るのが簡単な物から難しい物へと並べたんだと思います」
Ｙ君　「二人の発表を聞いて、自分の考えとは違っていたけど、二人とも分かりやすくて良かったと思います」

Ｙ君とＳさん、Ｍさんでは、筆者の説明の仕方についての考えが異なっていたが、その違いを認め合うことで、自分の考えを見つめたり深めたりするきっかけになったと思われる。

【授業後の子どもの感想】

・いろいろな接続語があるのが分かった。説明文も順番に書いた方が良いと分かってびっくりした。
・説明の仕方の工夫を考えることができて、「説明文マスター」に少し近づけた。
・昨日は、友達と考えが似ていたけど、今日は、友達とまったく違っていた。友達の考えも良いと思った。

【単元全体を通した子どもの感想】

・説明文をすらすら書けたので、自分の力が付いたなと思った。
・食べ物のひみつを図に描いて、リーフレットにまとめて書くのがもっと楽しみになってきた。
・リーフレットにまとめる時は、もっと分かりやすくしたい。
・リーフレットをうまく書けてよかった。明日の読み合いがとても楽しみだ。
・最初のころに書いた文はとても下手だったけど、リーフレットは自分で工夫して色々書けたのでよかった。

【成果】

・単元を貫く言語活動として、教材文で学んだことと関連付けながらリーフレット作りに取り組ませたことにより、中心となる文をまとめたり、文章構成や段落相互の関係を捉えながらまとめたりする力が高まった。
・自分の考えを文章として表すことに苦手意識を感じていた子どもでも、自分の考えを文章に表わす方法をスモールステップで学ばせ、意欲づけを図ってきたことで書くことへの抵抗感がなくなってきた。
・発表することに苦手意識を感じていた子どもたちも、グループでの交流を通して自分と相手の考えの共通点や相違点を見出すとともに、自分の考えについて自信をもって発表しようとする姿が見られるようになった。

完成した「すがたをかえる魚リーフレット」